

# 少年メッセージ 2025

## 和歌山県大会



日 時：令和7年8月2日(土) 12時30分～

場 所：ホテル浦島 コンベンションホール鳳凰(那智勝浦町)



公益社団法人和歌山県青少年育成協会

# 目 次

○ ごあいさつ	.....	1
○ 大会の様様	.....	2
○ 中学生のメッセージ		
最優秀賞	・ 芸術の力	
	那智勝浦町立宇久井中学校	3年 倉橋佐和 ..... 7
優秀賞	・ ア・ホール・ニュー・ワールド	
	古座川町立明神中学校	3年 奈須麻実 ..... 8
	・ 価値の物差し	
	開智中学校	3年 間瀬千尋 ..... 9
	・ 私から始まる大きな一歩	
	和歌山県立古佐田丘中学校	3年 山中透子 ..... 10
入賞	・ 未来へつなぐ覚悟	
	有田川町立吉備中学校	2年 嘉成潤羽 ..... 11
	・ 変わる勇気、変わらぬ心	
	和歌山県立田辺中学校	3年 坂倉朱音 ..... 12
	・ 「言葉」	
	日高川町立丹生中学校	2年 山本陽太 ..... 13
	・ 心を揺さぶる	
	湯浅町立湯浅中学校	3年 嘉成葉月 ..... 14
	・ あなたと私の約束	
	白浜町立日置中学校	2年 徳田蓮 ..... 15
	・ 自然の声に心をゆだねて	
	岩出市立岩出第二中学校	1年 岩倉琴音 ..... 16
	・ 挨拶の力	
	新宮市立城南中学校	3年 大矢葉奈 ..... 17
	・ 愛のあるキャッチボール	
	紀の川市立打田中学校	3年 谷口くらら ..... 18
	・ あきらめない	
	海南市立海南中学校	3年 杉本則朝 ..... 19
	・ 礼儀	
	古座川町立古座中学校	3年 原くるみ ..... 20
	・ 諦めないこと	
	かつらぎ町立妙寺中学校	3年 森本竜生 ..... 21
	・ 音楽に想いをのせて	
	海南市立下津第二中学校	3年 森下杏美 ..... 22
	・ 感謝の言葉	
	御坊市日高川町中学校組合立大成中学校	3年 西田夢真 ..... 23
	・ ファーストペンギンへの一歩	
	和歌山市立伏虎義務教育学校	9年 東野瑞葵 ..... 24
○ 資料		
	・ 審査委員長講評	..... 27
	・ 「少年メッセージ2025」和歌山県大会開催要項	..... 28
	・ 審査基準及び審査委員名簿	..... 30

・「少年メッセージ2025」大会の経過及び和歌山県大会次第	31
・「少年メッセージ2025」和歌山県大会応募状況及び過去の応募数	32
・「第47回少年の主張全国大会」内閣総理大臣賞	33
・「第47回少年の主張全国大会」文部科学大臣賞	34
・「第47回少年の主張全国大会」国立青少年教育振興機構理事長賞	35



# ごあいさつ

公益社団法人和歌山県青少年育成協会

会 長 宮 崎 泉 (和歌山県知事)

1979年（昭和54年）の国際児童年を記念して開始した「少年メッセージ和歌山県大会」は、今回、47回目となり、県内各地から、8,823編もの作品を御応募いただきました。

この大会は、中学生の皆さんが、家族や学校、地域社会など、日常生活の中での実体験などを通して得た自らの考え方や将来の夢を発表することによって、広い視野と柔軟な発想力を養うとともに、論理的思考力や、自分の想いを他者に正しく伝える力を身につけることを目的として開催しています。

現代を生きる子どもたちが日頃感じていることや素直な想い、様々な考えに真摯に耳を傾けることは、私たち大人の責務です。

この文集には、今年度の県大会発表作品18編を収録しています。いずれも中学生の皆さんの他者を思いやる心や向上心などがみずみずしい感性により表現されており、感銘を受ける作品ばかりです。

一人でも多くの方に、中学生の心からのメッセージに触れていただき、今後の青少年健全育成に活かしていただければ幸いです。

本大会に御応募いただいた皆さんが、将来、和歌山のみならず、日本全国や世界を舞台に活躍されることを期待いたします。

最後に、本大会の開催に御尽力いただいた関係各位、そして日頃より子どもたちを温かく見守り、御指導いただいている教職員の皆様に、心より感謝を申し上げます。

# 大会の様



主催者あいさつ



来賓祝辞



発表者の紹介



発表者の紹介



表彰式



講評

## 最優秀賞



那智勝浦町立宇久井中学校 3年

倉橋佐和さん

## 優秀賞



古座川町立明神中学校 3年

奈須麻実さん



開智中学校 3年

間瀬千尋さん



和歌山県立古佐田丘中学校 3年

山中透子さん

# 入賞



有田川町立吉備中学校 2年  
嘉成潤羽さん



和歌山県立田辺中学校 3年  
坂倉朱音さん



日高川町立丹生中学校 2年  
山本陽太さん



湯浅町立湯浅中学校 3年  
嘉成菜月さん



白浜町立日置中学校 2年  
徳田蓮さん



岩出市立岩出第二中学校 1年  
岩倉琴音さん



新宮市立城南中学校 3年  
大矢葉奈さん



紀の川市立打田中学校 3年  
谷口くららさん



海南市立海南中学校 3年  
杉本則朝さん



古座川町立古座中学校 3年  
原くるみさん



かつらぎ町立妙寺中学校 3年  
森本竜生さん



海南市立下津第二中学校 3年  
森下杏美さん



御坊市日高川中学校組合立大成中学校 3年  
西田夢真さん



和歌山市立伏虎義務教育学校 9年  
東野瑞葵さん(※当日欠席)

# 中学生のメッセージ





## 芸術の力

那智勝浦町立宇久井中学校 3年 倉橋佐和

二〇二二年二月二十四日、ウクライナではロシアによる軍事侵攻が始まった。戦争が続く中、ウクライナ国立歌劇場ではオペラやバレエの公演が続けられているという。空襲警報が鳴ると、公演中でも地下にあるクロークにすぐさま避難しなければならない。この危険な状況の中、なぜ公演は続けられているのか、これが私が最初に抱いた疑問だった。

私は、三歳からバレエを習っている。一度は世界のプロのおどりを観てみたいと思い、中学一年生の冬、ウクライナ国立バレエ団の公演を観に行った。公演を観て私は本当に驚いた。ウクライナが戦争中であることや、戦争の辛さを少しも感じさせることのない力強いおどりだったからだ。公演のあと、私は感動のあまり劇場から帰れないでいた。すると、バレリーナたちが劇場から出てきた。私は思い切って「一緒に写真を撮ってくれませんか？」と英語で声をかけた。すると

「もちろん！撮りましょう！」

と快く受けてくれ、一緒に写真を撮ってもらった。それからバレリーナたちがバスに乗って帰って行くのを見送った。バスの中から笑顔で手を振ってくれたことが「ウクライナでも頑張ります」という思いが込められている気がして私は思わず泣いてしまった。

公演を観てから私はウクライナ国立バレエ団に興味を持ち、調べるようになった。すると、踊っていたバレリーナの中には、父親が戦争の前線にいる人や、家族を戦争でなくした人もいた。私もバレエを習っているが、これまで自分や家族がいつ死ぬか分からないと思いながらバレエを踊ったことがあっただろうか。家族を失ってもバレエを踊り続けられただろうか。そう考えると、バレリーナたちのただならぬ覚悟に打ちのめされた。そして、私は単にバレエに感動したのではなく、踊りに込められたバレリーナたちの平和に対する強い思いに感動したのだと気づいた。

芸術監督を務める寺田さんの記事に、こんな言葉があった。「踊っている時だけは戦争を忘れることができる。いつか必ず戦争は終わる。苦しい中でも踊り続けないと、戦争が終わった後に何も残らない。苦しい時だからこそ、ウクライナの芸術を守っていくのが私たちの使命だと思うのです。」この言葉を読んで、バレエを踊ること、演劇という芸術を続けること、これが団員のみなさんにとっても、ウクライナに住む人々にとっても生きるための大きな支えとなっているのだと感じた。さらに、「芸術には戦争に打ち勝つほどの大きな力がある」ということに、感銘を受けた。踊っている時だけは戦争のことを忘れられるのは、芸術は人のよりどころであり、人にとってなくてはならないものであるからだと思ふ。だから、ウクライナ国立バレエ団は、どんなに大変な状況の中でも公演を続けることを選んだのだろう。

今もなおウクライナでは戦争が続いている。犠牲者は増え続け、戦争開始から三年あまりがたっても大変な状況が続いていることに変わりはない。それでも、ウクライナには一日も早く平和が来ることを祈って、自分のため、そして人々のために踊り続けるバレエダンサーたちがいる。このことを知ってから私は何不自由なくバレエを続けられる今の環境に感謝して踊ることを決めた。

平和な世界にするために私たちにできること、それは、様々な国の様々な芸術を知り、その中に込められたメッセージを知ることだと思う。芸術は言語に関係なく心を繋げることができる。だからこそ、世界各国が互いに批判し合うことなく、芸術を通して交流することができれば、戦争のない世界へとつながっていくのではないだろうか。

「芸術は戦争に負けない」

これが、ウクライナ国立バレエ団からの、私たちへのメッセージなのだ。



## ア・ホール・ニュー・ワールド

古座川町立明神中学校 3年 奈須 麻実

皆さんは、自分や自分以外の全ての人が暮らす社会の生活について、具体的に考えたことはあるだろうか。なければ、今少しでいいので考えてみてほしい。全ての人が豊かで公平に暮らしていける社会づくりはできているだろうか。そう、例えば高齢者の方、障がいのある方の社会生活はどうだろうか？

私があることを考えたのは、人権学習で「高齢者・障がい者理解」について学んだ時だった。取り組みの中に高齢者体験と車椅子体験があった。視界や関節などの動きを制限して移動や運動をしたし、車椅子を交互に押し合い、自分で動かしたりもした。どちらもまず、普段当たり前前にできていたことができない不便さを感じた。さらにその後、「自分も高齢者になった時階段でこけるかもしれない。車椅子を使うなら移動のときぶつかるかもしれない。」と、実際に体験して恐怖にも近い不安が際立ってきた。その時、最初に話したように、私は自分たちが今住んでいる古座川町で暮らしていく姿を想像してみた。そうして高齢化が進む町は、私を感じた不便さや不安をどれだけ解消してくれているのだろうか、と気になった。

私たち、すべての人が豊かで公平な社会生活を送るにあたって重要になってくるのが、バリアフリーとユニバーサルデザインだ。では、もう一つ考えてみてほしい。それは現状の社会でバリアフリーやユニバーサルデザインがどれくらい意識されているのか、だ。

昨年の夏休み、私達の学級は、古座川町内を回った。目的は、人権学習を通して学んだこと、すなわちバリアフリーとユニバーサルデザインの視点で自分たちが住む町を見ることだ。自分たちがこれから暮らしていく町は、全ての人が住みやすい町の作りになっているのか。私を感じた不便さや不安は、果たして解消される町なのか。役場や公民館、保健福祉センターなど町の中心となる施設から公衆トイレ、

道路、町営バスの停留所まで、実際にメモを取りながら調べた。エレベーター、手すりの形、道幅、段差、点字や多言語の音声案内など、十分な設備が備わっている部分、足りない部分を調査した。

改めて見ると、古座川町は福祉が設備を充実させようとする取り組みを行っていた。しかし、現状改善しなければならないと感じるところも多々あった。

この町に住んでいく私たちは、この現状を受け入れ不便さや不安を抱えたまま生活しなければならないのか。いや、私たちが変えていくべきだ。一気にすべてを解決できなくても、今まで学んできたことを使って少しずつ良くすることならできないのか。

そう考えた私たちは、調査の結果を資料にまとめ、古座川町の町長さんに時間を取っていただき報告させてもらった。私たちの視点で見た町の現状、素晴らしいところ、課題と解決策など、私たちの考えを直接伝えることができた。また、町長さんからもお話をしていただき、みんなが住みよい町にするための町の取り組みも聞くことができた。

近年SDGsに代表される、全ての人が豊かで公平に暮らしていける社会づくりの考え方が広まっている。しかし、それは社会的な流れであり、ほとんどの人は自分に直接関係ないと考えていると感じる。実際私もそうだった。しかし今回の活動を終えて、改めて今の自分にできること、人々が一丸となってすべきことについて考えた時、自分の中で一つの答えが出た。「知り、考え、実行する。」だ。この三つをキーワードに、みなさんもぜひ向き合ってみてほしい。積土成山、一人ひとりの小さな変化こそ、社会全体の大きな変化に繋がる。その変化は社会をより豊かにすると信じている。



## 価値の物差し

開智中学校 3年 間瀬千尋

皆さんは、何をもち自分の価値を感じていますか。成績の順位やSNSの「いいね」の数、他人からの評価によって、自分の価値が決まると思いませんか。かつての私はまさにそう思っていました。

小学校の頃、私は周囲に受け入れてもらえていないと感じていました。些細なことで悪口を言われたり、仲間外れにされたりすることもありました。理由もなく「あなたなんか嫌い」と言われることもありました。そんな中で、私は「認められたい」、「誰かに必要とされたい」と思う気持ちに次第に押しつぶされていきました。そんな時、私は「価値のない人間なのではないか」と考え、生きることに意味を見出せなくなりました。

その時、母がかつてお腹に宿していた子の話を思い出しました。私には4歳下の弟か妹が生まれるはずでしたが、その子はお腹の中で亡くなってしまったのです。初めてこの話を聞いたとき、私は言葉にならないほどの衝撃を受けました。しかし、その出来事を振り返ると、私は「生きている」ことこそがどれほど難しく、どれほど価値のあることなのかに気づきました。それをきっかけに、自分を必要以上に否定することはやめようと思いました。

中学校に進学すると、成績や部活の結果など多くの物事が数字で評価されるようになり、私はその数字に強くこだわり、それに執着しました。良い結果を出せば周囲に認められると感じ、その感覚が自分のモチベーションにもなっていました。しかし、結果が思うようになかった時、私は他人の評価を恐れるようになり、「今回の点数、悪かったね。」と言われることに怯え続けていました。私はいつの間にか、自分の価値を他人の評価に委ねるようになってしまったのです。そんな自分に気づいたとき、私はこのままではいけないと感じました。そこで、「自分自身の価値を見つける習慣」を始めました。毎日小さな目標を書き、それが達成できたかを振り返

り、良かったところや改善すべきところを書き出しました。他人の評価ではなく、自分が納得できる努力を大切にしようと思ったのです。この習慣を続けるうちに、たと思いうような結果が出なくても、「今日はここを頑張れた」「昨日より少し成長できた」と思えることが、自分の価値を実感することにつながると気づいたのです。

私たちは、つい他人の評価に左右されがちです。SNSのいいねやテストの点数に価値を感じてしまうことがあります。しかし、本当の価値はそんなものでは決まらないと思います。そして価値は他人に決められるものではなく、自分自身で感じるものです。たとえ他人に認められなくても、自分の努力を自分で認められるのであれば、それこそが自分の価値を見出せていると思います。

この作文も、最後は他人によって評価されます。評価から目を背けることはできませんが、私はこの作文を書き終えたとき、改めて自分の経験の重みを感じました。外からの評価を受け止めながらも、他人に左右されずに自分の価値を見出し、これからも努力を続けたいと思います。

価値を見出せたことで自信にもつながり、以前は避けていた人との関わりを少しずつ始めてみることができました。小学校でのつらい思い出はずっと残っていましたが、その中でも、ありのままの自分を受け入れてくれる存在に気づきました。私はその存在に支えられながら、自分の殻を少しずつ破っていきました。価値を見出せるようになって、私は前を向くことができました。そしてそれは難しくないことだと思います。私は、この気づきが誰かの心の苦しみを和らげるきっかけとなってほしいです。



## 私から始まる大きな一歩

和歌山県立古佐田丘中学校 3年 山中 透子

私には2歳年上の姉がいる。幼いころから姉のお下がりの服を着ることが多かった。学校の制服や体操服も、もちろんそうだ。時々「お下がりには嫌だな」と思うことがある。新しい服をいっぱい買えたら嬉しいし、買い物をするのも大好きだ。しかし、そんな私の考えはある衝撃的なニュースを見て変わった。

みなさんは、「衣類の墓場」を知っているだろうか。衣類の墓場というのは、大量の古着や廃棄された衣類が不法に投棄され、山のように積み上げられている場所を指す言葉だ。私は、この言葉を南米チリで廃棄された衣類の山が、深刻な環境汚染を引き起こしているというニュースを見たときに知った。私はその光景に言葉を失った。私は普段、小さくなって着られなくなった服は従妹に譲り、それ以外のはゴミとして捨てている。世の中には、服のリサイクル活動があることも知っている。だから、まさか衣類が自然豊かな土地に大量に捨てられていると考えたこともなかった。そこで、どうして衣類の墓場が存在するのかを調べてみることにした。

衣類の大量廃棄には、ファストファッションが大きく関係していた。ファストファッションは、安くて、すぐ買えて、おしゃれなことから特に若い世代に人気がある。ファストファッションは大量の衣類を生産するが、その多くが売れ残ってしまう。むしろ、売れ残る量をわざと生産しているのだ。売れ残った衣類は、倉庫で管理するよりも安く済むために廃棄される。売れ残りの衣類は、南米のチリなどの国々に、古着として輸出される。しかし、そこでも買い手がつかずに廃棄される衣類の数は、年々増加している。その数はなんと、毎秒トラック1台分にもものぼる。それは、ファストファッションは価格や流行を優先して造られ、品質が悪いからだ。廃棄された衣類は多すぎて焼却できず、最終的には砂漠などに投棄される。これが衣類の墓場だ。

しかし、ファストファッションが引き起こす問題

はそれだけではない。まず、これらの衣類を安く製造するため、労働者は低賃金で長時間の労働を強いられている。さらに、有害な化学染料が使われ、工場からの排水が海を汚染している。つまり、安くてかわいいと思って気軽に買った服の裏には、私たちが大切にすべき人権と環境保護が犠牲になっていた。この事実を知ったとき、私はとても悲しくなった。実際、私も同じような服を何着も買ったり、買ったのに全く着ていなかったりする服が手元にある。残念だが、私もまた、衣類の墓場を造っているファストファッション文化の一人だったのだ。みなさんも家の引き出しを覗いてみてほしい。きっと私と同じではないだろうか。私はこの事実を知ってから、「お下がりも悪くないな」と自然に思うようになった。実際に、お下がりの服の殆どはきれいで、まだまだ着続けることができるものばかりだ。

先日、地元のお寺で姉の部活動の発表会があった。姉は邦楽部という箏を演奏する部活動に入っている。いつもは制服を着て、箏を弾いているが、今回は着物を着ることになった。姉が着たのは祖母のお下がりだった。祖母のものということは50年ほど前の着物である。しかし、本番では他の着物に負けることなく、姉の黄色の着物は輝いていた。服を譲り渡すということは素晴らしいことだと改めて感じた。しかし、すべての服が着物と同じ運命を辿るわけではなく、ほとんどの衣類は簡単に捨てられているという現実を忘れてはいけない。私たち消費者は、適切な量の服を買い、大切に扱うべきだ。安くて流行の服をたくさん買って得られる満足感は一瞬で、環境汚染や人権侵害は一時的な問題では決してない。だから、このメッセージを多くの人に伝え、ファストファッション問題に目を向けてもらうことが、私にできる問題解決への大きな第一歩だと思う。私たち一人ひとりの小さな努力が、いつか世界を変えるほどの大きな力になるはずだ。



## 未来へつなぐ覚悟

有田川町立吉備中学校 2年 嘉成潤羽

「あとをよろしくお願いします。」これは、生涯をかけて戦争を憎み、平和の尊さを伝えようとした、広島県の「詩画人」が残した言葉だ。戦後80年、私たちにこの言葉の重さとそこに込められた想いを背負う覚悟はあるだろうか。

正直に言うと、平和学習は苦手だ。映像や写真で見る戦争は、すべてが残酷で悲惨だ。この日本で起こったことと言われても非現実的だと感じてしまう。そんな私が戦争について考えなおすきっかけになったのは、ある人物へのインタビュー記事だった。その男性は、戦争の中を生き抜いた父の言葉について語っていた。凄惨な戦場で兵士として身も心も痛みを耐えて生きながら、終戦をむかえてもなお帰国への希望は絶たれ、生死の境をさまようこともあったそうだ。そんな中で、彼はクレジットカード程の小さな紙に、単語を書き続けた。単語さえあれば自分は絵として表現できる、戦争がもたらす悲劇を次の世代に伝えなければならない。その強い意志が、膨大な量の作品として現在に残されている。私が平和学習の中で、最も印象に残っている「おこりじぞう」。その絵本の作画を担当したのが彼であると思ったときは、本当に驚いた。まるで本人から、「戦争を忘れてはいけない」、そう言われたような衝撃だった。怒りに満ちた表情で涙を流すお地蔵さんは、彼自身の気持ちとぴったり重なるように感じた。

「戦争」という言葉の恐怖、それは戦争を知らない私にはとても漠然としている。実際、戦争体験者は高齢化し、戦地の悲惨な状況を直接知る人は急速に少なくなっているという。戦争が「記憶」から「歴史」へと変わりつつある中、私たちは戦争とどのように向き合えばいいのだろうか。

戦争は単なる昔話ではない。テレビで見たウクライナの様子は、本当に今なのかと疑いたくなる程であった。ではこの悲劇は、何がきっかけで始まるのだろうか。戦争は「国と国との大げんか」と表現される。ある日、私はスーパーで子供の泣き叫ぶ声に足をとめた。

買い物カートの取り合いで、兄弟げんかが勃発した。お兄ちゃんが無理矢理主導権を奪い、弟がお兄ちゃんの腕をつかんで離さなかった。腹を立てたお兄ちゃんが、弟を突き飛ばし、弟は泣き出してしまったのだ。私は小さな戦争を見た気分になった。自分の欲を優先し、相手の痛みを考えず、周囲の迷惑も気にしない。戦争もけんかも、お互い何かを無理矢理手に入れようとするのが争いの火種となっている。「腹が立った」で人を傷つける時代だ。「けんかだからたいしたことはない」とは言えないと思う。ただ、この二つには大きく違うところがある。けんかをするのは当事者同士、戦争はほんの一部の人間が起こし、多くの命を無理矢理戦場へと駆り立てる。国同士の争いは、本来守られるべき多くの人々を不幸にしてしまう。時代の移り変わりと共に、こんな恐ろしいものが足音を潜ませて近づいてきているかもしれない。できれば目を背けていたいと思ってしまった。

記事の男性は「父の考えや遺したものが、今の私たちにとってヒントになるのではないか」と考え、本を執筆した。戦争を起こさせないために、暴力ではなく表現で戦うという父の生き方が、男性の心にしっかりと焼き付いているのだと思った。自分が戦争で負った傷、原爆がもたらした脅威、被爆した人々の苦しみは、簡単に背負えるものではなかっただろう。「こわいものは描きたくはないのだが、こわいものを地上から無くすためには描かなければならない」。おこりじぞうの末尾に書かれた言葉からは、反戦と平和への想いを伝えるのだという強い意志と覚悟が感じられる。私たちはもっと戦争を知らなければならない。戦争体験者が減ったとしても、日本のあちこちに反戦・平和への想いは遺されている。それらに向き合うことで、自分の中に蓄積されていく恐怖心が、世界から戦争を遠ざけるためにもっとも必要ではないだろうか。

「あとをよろしくお願いします」、私は今その言葉としっかりと向き合う覚悟を決めた。



## 変わる勇気、変わらぬ心

和歌山県立田辺中学校 3年 坂倉 朱音

「不易流行」今の日本において、この言葉が大切なのではないかと考える。

不易流行とはいつまでも変化しない本質的なものを忘れない中にも、新しく変化を重ねているものを取り入れていくことである。私がこの言葉を知ったのは、生活指導の先生が校則について話している時だ。先生は

「校則には、変えてはならない不易の部分と、時代に合わせて変えていくべき流行の部分がある。」

と話していた。スマートフォンの扱いなどは、時代の流れによって生まれた流行に合わせて考え直す必要があるけれど、制服の着こなしなどは、いつの時代でも変わらない不易だという。

この話を聞いた時、私は初めて「不易流行」という言葉の奥深さを感じた。これまで校則は「ただの決まりごと」だと思っていたけれど、その裏には、「どうすれば社会の中でより良く生きていけるか」という問いがあると知ったからだ。同時に、これは校則だけでなく、私たちの社会全体に言えることだと思う。

たとえば、日本の伝統文化には「不易流行」の精神が色濃く表れている。茶道、歌舞伎、和食。どれも何百年という時を超えて受け継がれているが、全く同じ形で続いているわけではない。たとえば、和食は外国人観光客向けにベジタリアン用のメニューを用意したり、伝統的な調味料と現代的な食材を融合させたりする工夫が見られる。それでも四季を大切にしたり、素材の味を生かすという「和食の心」は変わっていない。

このように「変わらないもの」と「変わっていくもの」のバランスがとれているからこそ、日本の文化は今も世界に誇れるものとして存在しているのだと思う。

一方で、今の日本には「不易流行」のバランスが崩れてしまっているように感じる場面もある。たと

えば、SNSの普及により、情報や価値感の「流行」が一瞬で広まり、次から次へと新しいものが求められている。便利さやスピードは確かに魅力的だけれど、それに振り回されてしまい、「自分はどうしたいのか」「何を大切にしたいのか」といった、「不易」な部分を見失っている人も多いと思う。また、大人の社会でも「伝統を守る」という言葉が、変化を拒む言い訳になっているように見えることがある。働き方改革やジェンダー平等といった新しい価値観に対して、「昔からこうしてきたから」と耳をふさぐような姿勢は、本当の意味での「不易流行」とは言えない。

「不易流行」とは、ただ「変える」か「変えない」かを選ぶことではない。本当に大切なものは何かを見極めたうえで必要な変化を受け入れ、柔軟に対応していく。そのバランスこそが求められているのだ。

私自身、これから進学し、社会に出ていく中で、多くの選択を迫られることになると思う。その時、すぐに流されてしまわないように、自分の中にある「不易」を持ち続けたい。でも同時に、自分の考えだけに固執するのではなく、時代や人との関わりの中で「流行」を柔軟に取り入れる姿勢も忘れてたくない。

今、日本は大きな変化の中にある。少子高齢化、テクノロジーの進化、価値観の多様化など。どれもが私たちに新しい対応を迫ってくる。だからこそ「不易流行」という言葉がこれまで以上に重要になってくるのではないだろうか。

変わらないものを大切にしながらも、変わっていくことを恐れない。そのバランスを意識しながら、私たちはこれからの社会をつくっていかねばならない。

「不易流行」は、古くて新しい、日本人がこれからも大切にしていってほしい考え方だと、私は思う。

# 入賞



## 「言葉」

日高川町立丹生中学校 2年 山本陽太

ある日、僕は野球の練習試合で、投げても打っても少しも結果が出ず、しょんぼりしながら帰っていました。そんな時、近所のおばあさんが、

「さようなら」

と声をかけてくれました。僕も「さようなら」と返すと、なぜか心が軽くなって、もやもやした気持ちがとれたような気がしました。「次こそは」という思いにもなれました。

大会前には、学校へ向かう途中、おばあさんに、

「頑張れ」

と応援してもらいました。この温かい励ましの言葉が心に響いて、思わず、

「ありがとうございます。頑張ります」

と返しました。この時、僕はこの一言に力をもらえたように思います。相手にとっては、普通の一言だけでも、自分にとっては気持ちが変わる、心を動かされる挨拶でした。

僕が小学5年生の時、弟とキャッチボールをしていました。弟は、僕が強く投げたボールをとることができませんでした。

「そんなもつれんのか、しっかりとれよ。」

ときつく言ってしまう、弟を泣かせてしまいました。その時、僕は悔しそうに泣いていた弟を見て、何気ないほんの一言で人を傷つけ悲しませてしまうということを実感しました。

以前僕は、父に野球を指導してもらったことがあります。父は、一言

「下半身をしっかりと使え。」

とだけ言いました。この言葉通りに自分なりにプレーをしてみると、安定感のあるピッチングやバッティングが少しずつできるようになったのです。また、最近ある野球選手がテレビで「バッティングの時は、頭を動かさずに打っている」と言っていました。試合で試してみると、3打席目にホームランを打つことができました。その後、僕は練習でもこの言葉を意識するよ

うになりました。

これらの経験を通して、言葉には一言で気持ちを変えさせるという力があることを知りました。しんどい時、つらい時に「言葉の力」を意識して、自分や相手に向けて言葉を発することができるようにになりたいです。人を励まし、元気にさせる温かい挨拶ができる、人を傷つける一言とそうでない一言を区別できる、そういう人に僕はなりたいと思います。

僕の夢は、野球選手になることです。指導してくれる人からもらう言葉や自分が周囲にかける一言を意識して行動に移す。こういうところから始めると、人生は大きく変わると思います。

話すときや聞くとき、言葉をどう行動に移せるかを考える。日頃から、会った人と元気を分けあえるような挨拶を交わす。そうすれば、「言葉の力」で人を変えられると思います。人と人が支え合ってこそ、社会全体を明るく、よりよくできるのではないかと思います。

僕はこれからつらさを抱えている人をなくしていく、周りを良い気持ちにさせていく存在になりたいです。気持ちをすっきりさせる挨拶で、みんなが一日を楽しく過ごせるように。

「おはようございます。」と。



## 心を揺さぶる

湯浅町立湯浅中学校 3年 嘉成 菜月

マニュアルを超えた親切が、人の心を揺さぶり、未来を創る力を宿してくれる。以前、身をもってそれを学ばせてくれた1つの出来事があった。その経験は私にとって、親切の真の価値を見出すきっかけとなったものであり、私の将来の夢を形作ってくれたものでもある。

日常生活の中で親切に触れる瞬間。きっとこれは誰にでも、多かれ少なかれある。親切には人の心を大きく揺さぶる特別な力がある。その力こそが、人と人とをより深くつなげ、未来を輝かせるカギとなる。

私は以前、離れて暮らす姉に会うため、一人で遠くへ旅に出た。その帰り道の飛行機での話だ。楽しい時間を過ごした後の別れの寂しさと、一人で長い帰路につく不安が入り交じり、心の中では暗い大きな雲が広がっていた。姉と別れた瞬間から涙が止まらず、搭乗後もその状態は変わらなかった。機内で大粒の涙をこぼし続けた私に気づいてくれたのが、客室乗務員の女性である。彼女はそっと私に近づいて、小さな声で「どうしたの?」と声をかけてくれた。その一言だけでも私の心は少し軽くなった。しかし、彼女の行動はそれだけにとどまらなかった。隣の席に座り、私の話を時間が許す限り聞いてくれた。そして、降りる間際にアメとメッセージを書いたポストカードを微笑みながら渡してくれた。彼女のおかげで、不安と寂しさを押しつぶされそうだった心が軽くなり、目の前の景色がパッと明るくなった。

この出来事は、私にとってただの「親切」をはるかに超えるものだった。彼女の行動は、明らかに業務のマニュアルを超えた、相手の気持ちに寄り添った心あふれる「親切」だった。その時私は初めて「親切がもつ力」というものに触れた気がする。彼女の親切が、私の人生においてどれほどの大きな意味を持つようになったかを、ここで全て語るのは決して容易ではない。ただ、この出来事は今もお鮮明に、そして脈を打つように、私の心に深く刻みこまれている。

それ以来、私は客室乗務員という職業に憧れをもち始め、今では自分の将来の夢となった。もしかしら

彼女にとっては何気ない1コマだったのかもしれない。しかし、彼女の行動は、確かに私の人生に新たな道を示してくれた。

これをきっかけに、私は人の親切について深く考えてみた。親切とは一体何なのだろう。それは、相手の立場に立ち、寄り添い、相手を思った上で行動を起こすことだと思う。あの時の彼女にとってはごく自然な行動だったのかもしれない。しかし、私の視点では、あ那时的彼女の行動はマニュアルを超えた親切だった。こうやって、決められたことを超えていく心意気をもつことで、人の心に染みこんでいくような、そういった優しさや思いやりの心が生まれるのではないだろうか。私がそうだったように、マニュアルを超える親切には、人を、社会を、世界を変えるきっかけと可能性が隠されているのかもしれない。

私にとって、彼女の親切はまさに心の深いところにはっきりと残るものだった。その経験が無ければ、人の心に寄り添う親切の形と、その可能性についてここまで考えることはなかっただろう。私は今回のことで、人の小さな行動が、ちょっとした心が、誰かの人生に彩りを与えることを、身をもって学んだ。

私は今でも思い出す。あの彼女の寄り添ってくれた声を、柔らかい表情を。マニュアルを超えた親切は、私にとってこんなにも偉大なものに膨れ上がっていくとは思もしなかった。今ではそれが、私の人生の道しるべとなり、今度は私が人に与えたいと思えるものになった。

まずは、日々の生活の中で、普通のこと、決められたことを超える親切を人に向けていきたい。その小さな行動1つが、目の前の人を温めることにつながるかもしれない。また、もしかしたら誰かの、あるいは、もっと大きなものを明るく変えていける原動力になるかもしれない。その思いやりの輪が、彼女や私だけでなくもっと広がっていけば、優しさと輝きに満ちた世界が創りあげられていく。私はそう信じている。



## あなたと私の約束

白浜町立日置中学校 2年 徳田 蓮

私はこのメッセージを読んだすべての人に、一日一日を大切に、あることを意識して生活してほしいと思う。

「あることを意識する」のあることとは、「身の周りの人がいる生活を過ごせるのは当たり前じゃない」ということだ。私が意識して生活してほしいと思ったのには理由がある。私が実際に体験して感じたこと、後悔したことだからだ。

朝、まぶしい光で目を覚ます。

「はよ起きよしよ。」

と母の声。着替えて、ご飯を食べて、学校に行く。友達と笑って、帰ってきて、テレビを見て、お風呂に入っ  
て、眠る。そんな毎日が当たり前だと思っていた。何も考えずに、同じように流れていく毎日。それが「普通」だと信じていた。でもそうじゃなかった。

私が小学校の低学年の頃、母が事故で突然帰らぬ人となった。前触れもなく、言葉も交わせないまま。朝、優しい笑顔で笑っていた母が、夜にはいなかった。まだ幼かった私は、ただ泣くことしかできなかった。頭の中は真っ白で、心だけがぽっかりと穴をあけたまま、時が止まった。

一日一日が、どれほど尊いものだったのか。

「また明日ね。」

と言えた毎日がどれほど幸せだったのか。私はその日から、ずっと後悔を背負って生きている。

もっとありがとうと伝えたかった。もっと優しくすればよかった。もっと、一緒に笑いたかった。もっと、もっと、もっと。もう届かない想いが、胸にあふれてとまらなかった。

母がいない日々は、息をするのもつらいほどだった。新しい環境、新しい日々、全部が、「母はもういない」という現実を突きつけてきた。苦しくて、寂しくて、逃げ出したくなった。

けれど、そんな私を支えてくれたのもまた、「人の優しさ」だった。友達の言葉、先生のまなざし、家族のぬくもり。私は、人と人とのつながりの中で少しずつ

立ち直っていった。そして気づいた。失ってしまったからこそ、私は大切なことに気づけたのだと。

今、私は毎日を意識して生きている。「今日」という日を、もう二度と戻らない大切な1日だと思って。

隣にいる人の笑顔を、ちゃんと見ようと思う。「ありがとう」をちゃんと伝えようと思う。いつか突然、会えなくなってしまう日が来るかもしれないから。

私のように、あの日の自分を責めてほしくない。後悔に押しつぶされるような夜を、誰にも過ごしてほしくない。

だから伝えたい。今を、大切に生きてほしい。身近な人に優しくしてほしい。できることがあるなら、今してほしい。「当たり前」は、永遠じゃないから。

このメッセージを読んでもくれたあなたが、少しでも「大切なもの」に目を向けてくれるなら、私は、それだけで救われる気がする。

「一日、一日を大切に。」あなたと私の、約束です。



## 自然の声に心をゆだねて

岩出市立岩出第二中学校 1年 岩倉琴音

私には、心が疲れたときに思い出す、とっておきの場所があります。それは、祖母の家の近くにある林です。たくさんの木々に囲まれた場所には、いつも変わらず鳥のさえずりが響いています。その音に、私は何度も助けられてきました。

中学生になってから、私は色々なことで悩むようになりました。友達関係、成績のこと、将来のことなど色々な悩みが私の心の中にあります。どうしてかはわからないけれど苦しくなることがありました。そんな時、ふと思い出すのが、あの林で聞いた鳥達の声です。小学生のころ、私は夏休みに祖母の家に泊まりに行くのが大好きでした。祖母の家は山のふもとにあり、朝になると、窓の外から「ピピピ。」「ホーホケキョ。」ドラムのような「ドドド。」と鳴く鳥達のにぎやかな声が聞こえてきます。最初は、「鳥が鳴いているんだなあ。」としか思っていなかったのです。でも、ある朝、ふと目を閉じてその声を聞いてみるとまるで小さなコンサートのように思えてきたのです。高い声、低い声、ゆっくりした声、はずむような声。それぞれの鳥達が、自分のリズムで歌っているようでした。私はじっと座って、何も考えずに耳をすませてみました。すると、不思議と心がすーっと落ち着いていくのを感じました。自然の音には、人の心を落ち着かせる力があるのだとその時感じました。誰かの言葉でも音楽でもない、ただそこにある音。鳥達は人の心をいやそうと思っていないかも知れません。それでも、私はその声に何度も心を救われた気がするのです。

今も私は、学校や人間関係で悩むことがあります。そんなとき、祖母の家の林を目を閉じて思い出すのです。耳の奥で鳥の声を再生してみるのです。「ピピピ。」「チュンチュン。」「ホーホケキョ。」……。その声を思い浮かべると、少しだけ自分に戻れる気がします。イライラした心が落ちついてくるのです。「大丈夫。あなたはあなたのままでいいん

だよ。」自然は何も変わらずそこにあります。鳥達の声がそっと語りかけてくれるように感じました。

この間、久しぶりに祖母の家を訪れました。鳥達の声も変わらず響いていました。私はうれしさとなつかしさでいっぱいになりました。私は林の中に入り、木にもたれて、深呼吸をしました。すると、今まで張りつめていた心の糸が少しずつほどけていくのを感じました。そこで私は気づいたのです。自然は、私達に何も求めないけれど、いつも私達を受け入れてくれているということに気づきました。そして、自然の声に耳をすませることで自分の心の声にも気づくことができたのです。本当に自然は何も言わずに、私達の心に優しさといやしをくれているのです。

今、世界では自然が失われつつあると言われていています。でも、私にとって自然は、ただの風景や空気ではありません。心が迷ったとき、静かに寄りそってくれる大切な存在なのです。これからも大人になって、つらいことがあるかも知れませんが、でも私は、祖母の家のそばの林。そして鳥達の声のを忘れずにいたいと思います。そして、私も自然のように誰かの心にそっと寄りそえる人になりたいと思います。



## 挨拶の力

新宮市立城南中学校 3年 大矢 葉 奈

私は四月から、生徒会の一員として朝の挨拶運動を行っている。週に三回、生徒玄関の前に立ち、登校してくる人に「おはようございます。」と挨拶する活動だ。私はこの活動を通して、挨拶が持つ力や大切さ、自分自身の意識の変化に気づかされた。

挨拶運動を始めたばかりの頃、「無視されたらどうしよう」「うっとうしく思われたりしないかな」という不安でいっぱいだった。そのせいか、あまり大きい声で挨拶することができていなかった。挨拶運動を始めてから、ごく少数ではあるが、何も聞こえていないかのように通りすぎて行く生徒もいて、悲しくなった経験もある。しかし、活動を続けていくうちに、初めよりも挨拶を返してくれる人が多くなったように感じてきた。挨拶をすると、しっかり私の目を見て、元気よく「おはようございます。」と返してくれる人もいる。その姿を見ると、心が温かくなり、自然と笑顔になれる。挨拶を返されることが、こんなにも嬉しいことだと、この活動を通して実感することができた。

私は今まで、挨拶は返されるためにするものだと思っていたが、活動を行う中で、この考えが間違っていたことに気づかされた。それと同時に、挨拶の持つ力を知ることができた。挨拶は、人を元気にさせる力がある。人と人をつなぐ第一歩になるものだと私は信じている。自分から挨拶をすることで、誰かを少しでも明るくできるなら、それだけで意味があるのだ。

活動を通して、私自身の心にも変化があった。以前までの私は、朝が得意ではなく、ダラダラと学校に行っていた。しかし、挨拶運動を始めてからは、眠気は残っていても、朝から声を出すことで気持ちが引き締め、前向きな気持ちで一日を始められるようになった。自分から笑顔で挨拶をすることで、心にも余裕が生まれた。

挨拶の大切さを感じたのは、挨拶運動だけではない。

私は女子バスケットボール部に所属している。入部した頃の頃、当時の三年生には話しかけやすかった。だが、二年生とは関わりが少なかったこともあり、自分から、

二年生の先輩に話しかけることができなかった。結局、学年が上がってもぎこちない関係は続き、そのまま先輩たちは卒部してしまった。「もっと先輩たちといい関係を築きたかったな」と後悔した私は、現在キャプテンとしてチームメイトへの挨拶と声かけを心がけている。初めは挨拶運動のときと同じように、挨拶をしても会釈で返されることが多く、最近入部した一年生とも少しぎこちない関係だった。けれども、挨拶を続けていくと、後輩の方から挨拶をしてくれるようになった。また、後輩から私に話しかけてくれることも増えてきた。先輩・後輩という関係にとらわれすぎず、お互いに話しかけることができる関係になれたことで練習にも大きな変化が表れた。今までお互いに遠慮しながらの練習が、コミュニケーションをとりながらの練習に変化していった。そして、後輩から話しかけてもらえることがとても嬉しいことだと知った。部活内での他学年との関わりの変化や、新たな喜びの発見を身をもって経験し、挨拶・声かけを心がけてきて本当によかったと感じる。これからも、挨拶を大切に、チームメイトと良好な関係を築いていきたい。それを続けていくことで、クラスメイトや関わる機会の少ない他学年の人たち、地域の人々と良好な関係を築くことにつながるのではないだろうか。

私は、挨拶運動や部活での経験を通して、挨拶が持つ力や大切さを知り、日々の積み重ねが周囲に与える影響も学ぶことができた。どんなに小さな行動でも、続けていけばそれが人に伝わり、大きな変化につながる可能性がある。この学びを得たことは私にとっての大きな成長だと思っている。

これから先、社会に出てからも挨拶を大切にしたい。「おはようございます」「ありがとうございました」「いただきます」「ごちそうさまでした」などの挨拶を、口で言うのは簡単だ。だがそれらは相手を想う気持ちを込めて伝えることが重要だ。挨拶がもつ役割、それは、人間関係を築くうえで欠かせない基本であると同時に、お互いを尊重し合うための第一歩なのだと、私は確信している。



## 愛のあるキャッチボール

紀の川市立打田中学校 3年 谷口 くらら

「行ってらっしゃい。」  
学校へ行く時、遊びに行く時など、家を出る前に私と母が必ずするやりとりです。

小学生の頃は特に何も感じていなかったやりとりですが、中学校へ入学してすぐに反抗期に入った私は、毎日欠かさずするこのやりとりが恥ずかしくなっていました。そんな小さな理由から、私は母のこの言葉に対して、嫌々返していた時期がありました。

中学1年のある日、朝から母と喧嘩をした事がありました。気分が悪くなった私は、母と口を聞きたくなくなったので、いつもより早く支度を済ませて家を出る事にしました。足早に玄関へ行こうとした時、母はいつもと変わらず、「行ってらっしゃい。」と私に声をかけてきました。私は混乱しました。母が一体何を考えているのか、分からなかったからです。

混乱した私は、人生で初めて母の「行ってらっしゃい」を無視して家を出ました。学校へ行っても、朝の玄関での光景が頭から離れませんでした。どれだけ悩んでも、なぜ母がああ状況でああ言葉をかけてきたのか、分かりませんでした。学校が終わる頃には、せっかく声をかけてくれた母を無視してしまった罪悪感が1番大きくなっていました。家に帰ってすぐ、ためらいの気持ちを捨てて、母に謝りました。その頃には、喧嘩の内容なんて正直覚えていませんでした。頭にあるのは、玄関で無視をした自分への後悔、それだけでした。謝ったあと、聞きました。

「どうしてあの時も、いつも通り行ってらっしゃいと声をかけてくれたの。」

母は悩まず答えてくれました。

「行ってらっしゃいには、行って無事に帰ってきてね、という意味があるからだよ。」

私は思わず、ハッとしました。いつも何気なく使っ

ていた短い言葉に、これほど深い意味が込められていたのか、という驚きと、そんな気持ちがこもった大切な言葉にしばらくの間、嫌々応えてしまっていた自分への惨めな気持ちでした。

私はこの出来事を通して、人と人との何気ない小さなやりとりこそ、大切にすべきだと気づきました。『会話のキャッチボール』という言葉がありますが、それは一方的な話ではなく、相手の言葉を理解して、それに対して自分の考えを返答する事で、会話がスムーズに成り立つ状態の事を言います。しかし、これでは言葉を受け取った人が気持ちを読み取ろうとせずに、適当に言葉を返して会話が成り立つと『キャッチボール』が完成してしまうので、最も重要な事が足りていません。必要なのは、何気ないやりとりを、『会話のキャッチボール』で済ませず、少し発展させた、『愛のあるキャッチボール』でやりとりすべきだと思いました。『愛のあるキャッチボール』が成り立つ瞬間は、投げる人は、言葉に気持ちを乗せるようにして、言葉を受け取った人はその言葉に込められた気持ちを丁寧に受け止めて、できる限り込められた気持ちを読み取ろうと努める事が出来た時。愛のあるキャッチボールをするには、双方に愛が必要です。愛があるのとないのとでは、やりとりをする場の温かさが大きく変化します。場が温かくなると、互いの気分が良くなります。そんな何気ない短いやりとりを大切に事が、相手との関係をより良くする鍵になるかもしれません。

その大切な事に気づいて以来、私は家を出る時も躊躇なく、返事ができるようになりました。だから、この習慣をなくさないために、今日も、明日も、これからも。家を出る時は丁寧に、気持ちを乗せて。

「行ってきます。」

## 入賞



### あきらめない

海南省立海南中学校 3年 杉本 則朝

「もういいや、無理」

僕はこれまで何度この言葉を言ってきたのだろう。勉強にしてもそう。小2で始めたサッカーも半年しか続かず、ゲームさえもクリアできなければすぐあきらめる僕。そんな僕が中学生になりました。

僕は部活動で野球部に入部しました。ルールも知らない状態で入部した初心者で、体力もありません。初めは頑張っていました。夏休みになると、暑さに負け、練習についていけなくなりました。僕はまた言います。

「もういいや、無理」

いつものように野球をやめたいと思うようになりました。そんなとき、友達に「お前サボってんのか!」などの言葉を投げかけられ、僕の精神が保てなくなり、なにもかもうやになった結果、学校も休むようになりました。

そして僕は、野球をやめたいと母に相談しました。すると母は一言、「後悔するよ」と言いました。僕はその時、あまり意味が分かりませんでした。続いて母は「最初から上手いくはずない、自分のペースでいけばいい」と言いました。そのとき、僕はみんなと同じペースでついて行かなければいけないという思いだけでやってきたから、しんどいのだと気づきました。そこから僕は、自分のペースで練習しようと決めました。

まずは、ノックのボール渡しやキャッチャーの防具をつける手伝い、スコアラーとしてみんなのサポートをしました。みんなと同じ練習をせずにいることで僕は、みんなにまた「サボってんのか」や「ずるいぞ」と言われないう心配でした。でもある日、チームメイトは思いがけず「ありがとう」と言ってくれたのです。チームメイトは僕のことをわかってくれていると気づいた瞬間でした。安心しました。もう一度みんなと一緒に頑張ってみようという気持ちになりました。そして、段々とみんなについて行けるようになり、去年の8月からみんなと同じように練習に参加するようになりました。練習はきつく、しんどいことはありますが、大好きなチームメイトが僕のことを支えてくれていると思うだけでとても楽しく練習に取り組むこと

ができました。しかし実力はまだまだで大会や練習試合での出番は少なく、ベンチでスコアをつけるのが僕の仕事でした。それでもみんなの役に立てていると満足していました。ベンチが僕の活躍する場所だったのかもしれない。

そして迎えた4月12日、学校のグラウンドで強豪日高中学校との練習試合がありました。1試合目はいつものようにスコアをつけて応援していました。3対4で惜しくも逆転負け。そして2試合目、1試合目でレギュラーが2人怪我をしてしまいました。「もしかして僕の出番かな」と思い、どきどきしていました。そこで監督が「則朝、いくぞ」と声をかけてくれました。

「8番レフト、僕」2回裏ノーアウト満塁。絶好のチャンスに僕の出番が来ました。むっちゃ緊張して「どうしよう」と心の中で何度もつぶやいていました。簡単にツーストライクと追い込まれました。「三振だけはしない」3球目、僕は来たボールを思いっきり振りぬきました。打球はレフトの頭上を越え、タイムリーツーベースで2点入りました。二塁ベース上の僕に、ベンチでは全員が立って祝福してくれました。すると後ろから、グラウンドで練習していた陸上部もみんな大きな拍手をしてくれたのです。涙が出るぐらいうれしい瞬間でした。僕の人生初ヒットでした。

あのとき野球をあきらめていたら、こんな感動は味わえなかったと思います。この作文を書いているとき、先生が次の詩を紹介してくれました。

おそろしいこと

困難にぶつかることよりも

人にうらぎられることよりも

つらいことよりも

悲しいことよりも

苦しいことよりも

もっとおそろしいのは

あきらめてしまうこと

そこですべてが終わってしまうから

あのとき、あきらめなかったから、今、僕はここにいるのです。



## 礼儀

古座川町立古座中学校 3年 原 くるみ

私は最近、気になることがありました。それは、私が電車に乗ったとき、他の乗客がいるのにも関わらず、床に座ったり、寝転がったりしている人がいたことです。

私はこの光景を見て、少し怒りを覚えました。なぜなら、他にいる乗客に失礼だと思ったからです。私はこのような振る舞いに対して、礼儀がないと思ってしまいます。

礼儀とは、社会のきまりにかなう人の行動、作法によって敬意を表すことです。また、礼儀正しい人とは、挨拶や言葉遣いなどの基本的な作法を守り、相手を敬い、謙虚な姿勢である人のことを指すらしいです。

礼儀は、目上の人や初対面の人にはもちろん、仲の良い友だちや家族であっても気をつけなければなりません。しかし、あなたは礼儀正しくできていますかと聞かれると、自信を持って「はい」とは言えないと思います。特に、友だちや家族には、気をつけてはいるものの、礼儀を欠いてしまうことが多いように感じます。

そんな私ですが、礼儀がどれほど大切かを実感する出来事がありました。私は中学校に入ってすぐ、テニス部に入りました。毎日、一生懸命に仲間たちと練習をして、上手になっていくことに嬉しさを感じていました。そんななか、私が二年生になってしばらくして、試合形式の練習がありました。私は特に仲の良かったAちゃんとペアを組みたいと思っていたので、練習が始まる前にAちゃんと組みたいと言っていました。しかし、結局三年生の先輩とペアを組むことになりました。私は何も考えずに、「Aちゃんと組みたかったな」と言ってしまいました。顧問の先生がそれを聞いて、「ペアを組む子に失礼だろ」と怒られました。そのことを母に伝えると先生と同じことを言われてしまいました。

先生と母に怒られて、私が言ってしまった言葉が

先輩をどれだけ傷つけるような言葉だったのかに気づきました。無意識のうちに言ってしまった言葉が人を傷つけていたかもしれないなんて思いもしませんでした。私は取り返しがつかないことをしてしまったと思い、とても後悔しました。

このとき、「親しき仲にも礼儀あり」という言葉が頭に浮かびました。私は親しい人にお礼を言ったり、敬語を使ったりするという意味だと思っていました。礼儀は、敬語を使ったり所作であったりと、堅い印象があるものです。確かにそれも礼儀に違いないのですが、それだけが礼儀ではないということに気づきました。礼儀とは、相手のことを大切に思う気持ちなのではないでしょうか。例えば、「おはよう」や「いただきます」といった挨拶も礼儀だし、疲れている人を見て、「大丈夫」と声をかけるのも、相手の立場になって言葉を発するだけでも礼儀といえると思います。だから、礼儀は初対面の人や目上の人にはもちろん、親しき間柄の人にも意識しなければならないものだと思います。

私は今年で中学校を卒業します。日本では二〇二二年に成人年齢が引き下げられて、十八歳から成人になります。これから高校生になり、社会人になっていく中で、これまでとは違った人間関係ができてくると思います。礼儀はよりよい人間関係を築いていくために、とても重要なものだと思います。また、日本は世界の中でも礼儀正しい国だと言われていました。その印象がずっと長続きしてほしいと心から思いました。それと同時に礼儀がいいのは、日本の誇りでもあると思いました。だから、私はこれから今よりもっと礼儀を大切にしたいし、世界中の人々が礼儀正しく、人を傷つけることのないように生きてほしいです。それが今の私の願いです。



## 諦めないこと

かつらぎ町立妙寺中学校 3年 森本 竜生

「もっと走りたい、諦めたくない。」私は2年前の春にこの思いを強く抱きました。あれから2年経ち、最終学年の今も仲間と共に走り続けています。私の2年前の思いが叶ったからです。

2年前、小学校の卒業式が近づくにつれ2つの思いをもつようになりました。1つは、中学生になったらいろんなことに挑戦し、たくさんのことを学びたいという希望に満ちた思いです。一方、部活動に対して「やってみたい部活動がない。どうしよう。」と不安になる思いもありました。私は「走ること」が好きだったので部活動は「陸上部」に入部したいと思っていました。でも、私の入学する中学校には「陸上部」はありませんでした。つまり、私の「もっと走りたい」という思いを諦めなければならないということでした。何だかモヤモヤとした気持ちで小学校を卒業しました。そして、いよいよ中学校の入学式を迎えました。来賓の方からのお祝いの言葉を聞いていると、話の中に「勉強、部活動を頑張ってください。」という内容の言葉がありました。私は「陸上部がないのに、いったい何を頑張れというのだ。」と投げやりにも似た気持ちにもなりましたが、ふとある考えが思いついたのです。「そうだ、陸上部がないなら作ればいいんだ！」やっぱり私は走ることを諦められませんでした。

家に帰るとすぐに、私は双子の弟に、この思いを伝えました。不思議と同じ気持ちだったことを知り、お互い驚きました。そして、この瞬間からモヤモヤとした気持ちがなくなり、中学校生活への夢が大きく膨らみ始めました。

弟と話し合い、担任の先生に「陸上部を作りたい、走りたい。」と伝えようとした日の朝、ジュニア駅伝と一緒に練習した仲間から「陸上したいから先生に言おうと思うんだけど」と声をかけられました。2度目の驚きでした。「心が弾むとはこのことか！」と思いながら私たちは興奮気味に先生に伝え

ました。すると、私たち3人の思いは、先生から校長先生に、校長先生から教育委員会へと伝わり、ついにかつらぎ町が地域移行を進めている部活動の1つとして「陸上部」を作ってくれることになったのです。「もっと走りたい、諦めたくない。」この私の思いがついに叶ったのです。

創部が決まり、指導してくださる先生に、3人で挨拶に行きました。そして、「私たちの夢を叶えてくださってありがとうございます。頑張ります。」と挨拶すると、「夢が叶うのはこれからだ。」と笑顔でおっしゃいました。私は正直どういう意味だろうと思っていました。数日後に保護者も交えての顔合わせのとき、先生が「3人と、全国の舞台を見たいと思います。」と話してくださいました。あのときの言葉の意味がやっと理解できました。「全国？私たちが？」と、一瞬驚きましたが、こんな言葉をかけてくれる先生のもとで「全国という舞台に3人で行きたい！」と思うようになりました。

あれから2年の月日が経ちました。3人から始まった陸上部は、小学生の仲間も増え43名の「陸上部」になりました。私はキャプテンとしてみんなの前で体操をします。私が「1、2、3、4」と号令をかけると「5、6、7、8」と元気な声が返ってきます。仲間と共に走れる喜びを感じる瞬間です。私はこの瞬間があることに感謝し、今を「走りたい」です。私はこの諦めない経験が「自信」になりました。だから、もう無理だと思って諦めようとしている人たちに伝えたい。「諦めないことの積み重ねが自信になり、今までの頑張りが実を結ぶ日がきってくる！」

そして、私はこれからも「諦めない！」そう心に誓い、この先も仲間と一緒に走り続けていきます。



## 音楽に想いをのせて

海南市立下津第二中学校 3年 森下 杏美

その演奏を聴いたとき、心が躍った。感動で胸が張り裂けそうになった。演奏終了後、会場いっぱいにあふれる拍手の中で、演奏を聴いて涙している人もいた。「音楽の力ってすごい。」私の胸は熱くなった。

これは、小学校4年生だった私が、下津第二中学校音楽部の演奏を聴いたときのことだ。舞台の上のお兄ちゃんやお姉ちゃんはとてもかっこよく、輝いて見えた。そして、私もいつか下津第二中学校音楽部の一員として、聴いている人を感動させられるような演奏をしてみたいと思った。

翌年、私は小学校の金管バンドに参加し、本格的に音楽を始めた。そして、6年生。来年はよいよ憧れた下津第二中学校音楽部に入部し、先輩たちとにぎやかに演奏ができると、期待に胸を膨らませた。

小学校を卒業し、私は下津第二中学校に入学した。部活動はもちろん、音楽部。それ以外は考えられなかった。しかし、私が入部したとき、部員はたった4名で、新入部員は私一人だけだった。総勢5名。今まで思い描いていたにぎやかな音楽部からは想像もできないくらい寂しい人数だった。それでも、先輩たちは私に優しく接してくれ、練習はとても楽しく、充実していた。人数は少なくとも、ここは私が憧れた下津第二中学校音楽部。ここで、精一杯自分の音楽を奏でていこうと決意した。

一昨年の夏、3年生の先輩3人が引退し、部員は私と2年生の先輩一人の2人になった。2年生になった春、新入生は誰も音楽部に入部しなかった。そして、昨年の夏、たった一人の先輩が引退し、ついに、下津第二中学校音楽部員は私一人になった。

放課後、誰もいない音楽室。私一人のアルトサックスの音が寂しく響く。たった一人で、黙々と練習する日々が続いた。そんな毎日は、不安で寂しかった。辛かった。「本当に寂しい。もう一人では無理。音楽部を辞めよう。音楽を諦めよう。」涙と共に、やり場のない感情が込み上げてきた。

そんなとき、声をかけてくれたのは、音楽部の顧問の先生や、引退した先輩たちだった。先生は私に熱心な指導をしながら、いつもそばで励ましてくれた。先輩たちはときどき音楽室に足を運んで、私の練習にとことんまで付き合ってくれた。そして、「部員は一人だけど、私は決して一人ではない。音楽を通してたくさんの人たちとつながっている。」ということに気づいた。それからは、「寂しかった放課後の音楽室」は、私にとって、「音楽を通してつながった大好きな人たちとの絆を紡ぐ大切な場所」となった。

その後、私は精力的に練習に打ち込み、海南市内4校による合同演奏会では、ソロパートを担当させてもらった。ソロパートは緊張で足が震えたが、私を支えてくれた先生、先輩たちを思い出し、感謝の想いを音楽にのせ、全力で吹ききることができた。私をずっと温かく見守ってくれた両親も、笑顔で拍手を送ってくれた。「音楽を、下津第二中学校音楽部を辞めなくてよかった。」胸が熱くなり、自然と涙があふれた。

この4月、私は3年生になり、1年生が6人も入部してくれた。笑い声があふれる、活気のある音楽室が戻ってきた。とてもうれしく、先輩として、音楽部部長として、身の引き締まる思いである。

下津第二中学校は、2年後に統合される予定であり、音楽部の歴史もあと少しで幕を閉じることになる。だからこそ、私が大好きな下津第二中学校音楽部の伝統やすばらしさを、最後を担う後輩たちに惜しみなく伝えていきたい。また、私が周りの人たちに支えられたように、後輩たちをしっかりと支えていきたい。そして、支えてくれた人たちへの感謝の想いや仲間と共に演奏できる喜びを、心を込めて奏でる音楽にのせて、聴きに来てくれた人たちの心に届けていきたい。



## 感謝の言葉

御坊市日高川町中学校組合立大成中学校 3年 西田 夢 真

皆さんは、お父さんやお母さんに感謝の言葉を伝えることができますか。いざ改まって伝えるとなると、私は恥ずかしくてできていません。でも、家族という存在は私の中で常に大きく、自分の心を温かくしてくれるものだ日々感じています。

私は今、父と2人暮らしをしています。2人で暮らし始めたのは小学校3年生の頃からで、それまではお母さん、お父さん、私、妹の4人で暮らしていました。ある日母に、「私たちが離ればなれになったらどちらについてくる？」と聞かれました。妹がお母さんと暮らすと聞いたので私は、「お父さんと一緒に暮らす。」と言いました。その時私は“妹がお母さんについていくとお父さんが独りぼっちになってしまう”という気持ちから父と暮らすという言葉が自然と出てきました。父はこれから1人で娘を育てていくことになる。私の決断は、家族にとってすごく大きなことだったのだと自分が成長するにつれ、感じるようになりました。

父と暮らしながらも祖母や従兄弟たちにお世話になることもありました。父の仕事が長引くときには、目の前にある祖母の家で寝ることもあり、2人暮らしに寂しさを感じることはありませんでした。そして中学に入りたての頃に、私には新しいお母さんができました。さらに犬も飼うことになり、我が家のにぎやかさが何倍にもなりました。家に帰ると迎えてくれる人がいることの嬉しさ、美味しいご飯が作られている喜び、休日一緒に出かける時の充実感。毎日が楽しく、心が躍っていました。バレーをしているときにも毎日車で送ってくれたり、どんなに遠い所の大会でも応援に駆けつけてくれたり、自分のためにここまで一生懸命になってくれる人に囲まれていることが幸せで感謝の気持ちでいっぱいでした。でもその時も私は恥ずかしくて“ありがとう”が言えませんでした。

そんな中、私は再び父と2人暮らしをするように

なりました。私は、もう以前のように楽しく過ごすことはできないと思っていました。でも、父はそんな自分とは裏腹に、いつでも私のことを全力で受け止めてくれました。わがままなことたくさん聞いてくれたり、色んなところへ連れて行ってくれたり、テストで思うような点数が取れなかった時も、「次がんばれよ」と励ましてくれたりします。もちろん悪いことをした時は本気で怒ってくれます。怖い所もあるけれど根は優しい不器用な父。こんなに最高な人は他にいないと思います。でもそんなこと思春期の私が父に言えるはずがありません。

しかし、少し前に父が病気になりました。私の前では笑顔で何事もないかのように明るく振舞っている父ですが、みるみる痩せていく父に私は何と声をかければいいのか分からなくなりました。

その時に私は、当たり前のこと、実は当たり前ではないということ、想いは伝えたいときに言葉にしないと伝わらないということを感じました。それは親だけでなく友だちや先生、自分を支えてくれる人たちも同じです。“ありがとう”この5文字に込められた思いは言う人も言われる人も笑顔に、幸せな気持ちにしてくれます。こんな魔法の言葉、他にはありません。

私の周りには私を大事にしてくれる人がたくさんいます。そんな素敵な人たちをこれからも大切にしていきたい。そして、いつでもどんな時でもそばにいてくれた父。なかなか素直になれない私だけれど、1番に感謝を伝えたいです。この場を借りて言わせてください。

「お父さんいつもありがとう。」



## ファーストペンギンへの一歩

和歌山市立伏虎義務教育学校 9年 東野 瑞 葵

皆さんは「ファーストペンギン」という言葉を知っていますか。自分自身が「ファーストペンギン」になろうとしたか。もしくはなっていたのか。そんなことを考えたことはありますか。私は中学2年生になるまで考えたことはありませんでした。それ以前に、「ファーストペンギン」という言葉を聞いたことがなかったのです。

私が中学2年生になってすぐの出来事です。担任の先生の学級通信の一部に、このような文が載せられていました。

『勇気をもって挑戦する一人目のことを「ファーストペンギン」というそうです。ペンギンの群れの中から魚を求めて最初に飛び込む一羽のペンギンのことです。海には天敵がいるかも知れない。それでも勇気をもって飛び込むペンギン。その「勇敢なペンギン」のように、リスクを恐れず、初めてのことに挑戦する人を敬意をこめて「ファーストペンギン」と呼ぶそうです。』

私はその時初めて「ファーストペンギン」という言葉と意味を知り、同時に「私の周りでファーストペンギンになるのは誰なのだろうか？ やっぱりあの子とかあの子とかかな？」と思っていました。私は、自分自身が「ファーストペンギン」になるということを考えていなかったのです。知らず知らずのうちに、新しいことへ挑戦するということを恐れ、諦めていたのです。

そこで私は、自分で「ファーストペンギン」について調べることにしました。調べ進めていると、驚くべきことを発見しました。「ファーストペンギン」に対する言葉として、「セカンドペンギン」という言葉があるのです。「セカンドペンギン」とは、ファーストペンギンに続く二羽目のペンギンであり、ファーストペンギンによって安全が確認されたあとに海に飛び込むペンギンを指す言葉だそうです。それを読んですぐに、私だ、と感じました。または、「セカンドペン

ギン」でもなく、更にその後に飛び込むペンギンだとも思いました。そう思うと、改めて自分が「ファーストペンギン」になることを考えていなかったこと。挑戦することを諦めていたこと。それらに恥ずかしさと、悔しさを感じました。失敗を恐れず新しいことに挑戦してみよう。そう決めました。

それから私は、今まででは考えられないくらい、新しいことへ挑戦してみました。理科の自由研究に、ビブリオバトル、本のポップをかいてみる。すこしのことで、成功、失敗は必ず何かをもたらしてくれる。そう信じて、行動しました。当たり前ですが、いきなりそんなことが簡単にできるわけありません。実際に、ビブリオバトルでは、昔先輩が発表していた記憶と少しの情報のみで、不安が募るばかり。挑戦というものがこんなにも重いものだと思われ、心で感じました。結果も、望んだ結果を出すことができず、悔しい思いをしました。他にも、思うような結果が出なかったり、失敗もたくさんしました。ですが、失敗した分、成功だってありました。初めての自由研究では、挑戦したいテーマを見つけることができ、楽しみながら結果を出すことができました。それらの失敗と成功。その過程でのやりがい、小さな発見が、今まで以上に大きいものとなり、新しいことに挑戦するのが楽しいものだと思えることができました。目に見える変化が無くとも、挑戦がもたらす「成功」と「失敗」の経験が、少しずつ、自信を与え続けている。「ファーストペンギン」への一歩を進み続けている。私はそう感じています。

私はこれからも挑戦を続けたいです。今も何処かで、「ファーストペンギン」は、うまれています。みなさんも、挑戦を繰り返し、「ファーストペンギン」への一歩を踏み出していきませんか。

# 資料





## 講 評

審査委員長 上 原 一 弥

「少年メッセージ2025」和歌山県大会は47回を迎え、本年度の応募総数は、8,823点にという多くの作品が応募されました。例年多数の応募があることは、本県の中学生の少年メッセージへの興味の高さの表れであり、その関係者の一人として非常に嬉しく思います。

少年メッセージ開催の趣旨である「中学生が体験などを通して得た考え方や将来の夢を発表することにより、少年たちに対する県民の正しい理解を深め、郷土の未来を担う若者を育成すること」にふさわしい、純粋で新鮮な感性をもって、社会、学校、地域、伝統文化などについて見つめ、活動を通して自分自身が体験したことを学びに昇華していくことにより、自分の意識や考え方が大きく成長したことが描かれていました。くわえて、発表審査では自分が書き上げた文章をどのような言葉で表現するのも重要です。自分が伝えたいことを聴衆にどう共感させたいのか、言葉に説得力をもたらす話し方はどうのようにすればいいのか、その伝え方の工夫は自分のものとしているのか・・・それらも、少年メッセージの大きなポイントです。

さて、県下各地方選考会を経て推薦されてきた18点の作品は、題材、内容、視線の捉え方など素晴らしいものでした。少年メッセージの趣旨のもとに審査は非常に難しいものでありました。

そんな中、最優秀賞を受賞された那智勝浦町立宇久井中学校3年倉橋佐和さんの「芸術の力」は、戦争という個人では抗いがたいことに対して、自分が取り組んでいるバレエを通して経験した芸術の力が小さいながらも大きな意思を感じさせることを強く訴えかけていました。中学生らしい素直で純粋な視点から、芸術が人類の大きな課題への問題提起をされました。自分自身の思いを客観性に富む表現で発表され、非常に大きな感銘を受けました。

また、発表時の話し方も言葉の強さを抑えつつ、抑揚や間を活かした話し方から、優しさが伝わり、「芸術の力を信じて取り組んでいく」という強い気持ちが伝わりました。

また、優秀賞を受賞された古座川町立明神中学校3年奈須麻実さんの「ア・ホール・ニュー・ワールド」では、障害者教育での学びの中で、自分が暮らす街をバリアフリーやユニバーサルデザインの観点

でどう取り組んでいるかを見つめ直し、それらを進めていくために何をすればいいのかについて調査を行い、提案しました。具体的な活動もさることながら、「知り、調べ、実行する」という自身の活動を整理した三つのポイントが、社会をよりよくするという強い意思が伝わる発表でした。

同じく、優秀賞を受賞された開智中学校3年間瀬千尋さんの「価値の物差し」は、他人の評価に左右されがちな意識という誰もがぶつかる課題に正面から取り組み、悩みながら自分が物差しを作り出し、乗り越えていくことの素晴らしさを書き上げていました。そして、ありのままの自分を受け入れてくれる存在に感謝を伝えるとともに、自分だけでなく誰かの苦しさを和らげたいと気持ちに到達したとても共感できる発表でした。

同じく、優秀賞を受賞された和歌山県立古佐田丘中学校3年山中透子さんの「私から始まる大きな一歩」は、衣類の墓場というニュースを見たことから、衣類の廃棄の持つ世界的な課題に自分自身が関わっているという自分事として捉えることから始まり、どのようにすればその課題を解決できるのかを、自分自身の行動や地域の活動から考え、衣類の適切な必要量について提案しました。常に素直に述べられていた意見が印象的でした。

どの作品からも、中学生らしい主張や感情と推敲を繰り返し、話し方を鍛錬してきたのが伝わり、生徒の皆さんの努力と研鑽に感動しました。また、生徒の気持ちをかなえるべく、作文指導・発表指導にご尽力いただいた先生方、並びにご支援いただいたご家庭のみなさまに、厚く御礼申し上げます。

最後になりましたが、本大会の運営にご協力いただいた多くの皆様のご尽力に感謝申し上げます、講評とさせていただきます。

# 「少年メッセージ2025」和歌山県大会開催要項

## 1 趣 旨

子どもたちが、社会の一員として自覚と責任に目覚め、心身共に健やかに成長することは 県民全ての願いである。

「少年メッセージ2025」和歌山県大会は、人格を形成する上で重要な時期にある中学生が、日常生活の中での実体験などを通して得た自らの考え方や将来の夢を発表することによって、中学生に対する県民の正しい理解を深めると共に、郷土の未来を担う若い世代の育成を図ることを目的とする。

## 2 主 催

公益社団法人和歌山県青少年育成協会、独立行政法人国立青少年教育振興機構  
〒640-8319 和歌山市手平2-1-2 和歌山ビック愛9F

## 3 協 賛

社会福祉法人和遊協社会福祉事業協力会  
ニュース和歌山  
和歌山特報社

## 4 後 援

和歌山県、和歌山県教育委員会、和歌山県市長会、和歌山県町村会、和歌山県PTA連合会、毎日新聞和歌山支局、朝日新聞和歌山総局、読売新聞和歌山支局、産経新聞社、NHK和歌山放送局、テレビ和歌山、和歌山放送、和歌山特報社、わかやま新報、紀伊民報、ニュース和歌山

## 5 開催日時

令和7年8月2日(土) 12:30~16:00(時間予定)

## 6 開催場所

ホテル浦島 コンベンションホール鳳凰  
東牟婁郡那智勝浦町勝浦1165-2 日昇館3階 TEL: 0735-52-1011

## 7 メッセージ発表者

和歌山市及び各振興局単位において、それぞれの審査委員により、応募作文の中から選出した各2名(県大会開催地方は4名)の代表者18名とする。

なお、発表者については、県関連行事においても発表してもらう場合がある。

## 8 発表方法

① 1人あたりの発表時間は、5分程度とする。

②内容は、家庭・学校・地域での生活や友人関係における悩みや喜び、未来への希望、社会へのユニークな提案や意見など、日頃考えていることや感じていることを自由に表現したもの。

## 9 大会審査及び表彰

(1) 主催者が委嘱した審査委員が、別に定める基準により、下記の表彰を決定する。

最優秀賞 1名

優秀賞 3名

特別賞（特に顕著とみられる作品がある場合のみ授与する。）

(2)大会発表者には、各賞の賞状及び記念品・副賞を授与する。

## 10 全国大会への出場等について

最優秀賞受賞者は、県代表として、独立行政法人国立青少年教育振興機構主催の「少年の主張全国大会」(11月に東京で開催)に出場候補者として推薦する。全国大会出場へは審査があり、中部・近畿ブロック(12名)からブロック代表として3名が出場できる。

ただし、ブロック代表に選出されなくても、全国大会へは努力賞受賞のため参加できる予定。

## 11 その他

- (1) 提出された作品の著作権は、当協会に帰属するものとする。
- (2) 県大会発表作品は、文集として冊子に編集し、各関係機関等に配布する。また、文集に掲載する作品には、本人の写真と氏名、学校名等を掲載する。ただし、原則として、提出のあった原稿を冊子に掲載する。
- (3) 前項にかかる作品は原則として返却しない。
- (4) 県大会当日の発表の様子については、より多くの県民の方に中学生に対する正しい理解を深めていただくため、当協会の公式YouTubeチャンネルでライブ配信（事前申込者のみ視聴可）する。  
なお、ライブ配信の視聴申込については、7月30日(水)まで、下記申込フォームにて、申込を受け付ける。

【申込フォーム】 <https://forms.gle/znntk857N7NgPtAV8>

- (5) 県大会当日の様態を収録した映像・音声や各地方から推薦された作品について、少年メッセージの広報、青少年健全育成などのため、当協会が使用やホームページへの掲載、又は他団体が活用することを当協会が適当と認めた場合は、使用できることとする。
- (6) スポンサーの募集
  - ・当事業に対して協賛し、支援していただける方を募集します。
  - ・協力いただいた方は、会社名や氏名等を文集等で掲載します。

# 審 査 基 準

- 1 原稿は、400字詰め原稿用紙4枚程度  
発表時間は、5分程度(4分30秒～5分30秒まで)
- 2 審査基準は、「内容・論旨」と「表現力」について行います。
  - (1)内容・論旨(150点満点)
    - ① 鋭い感性で、新鮮な主張であるか
    - ② 自分の考えを自分自身の言葉で表現しているか
    - ③ 個人の体験に基づき、社会に訴える主張であるか
    - ④ 提案や提言を実現・実践しようとする意欲が感じられるか
    - ⑤ 論旨が一貫していて分かりやすいか
    - ⑥ 内容に共感・感動できるか
  - (2) 表現力(100点満点)
    - ① 共感と感銘を与えていたか
    - ② 説得力のある話だったか
    - ③ 熱意と迫力があつたか
    - ④ 落ち着いて話していたか
    - ⑤ 聴衆に感動を与えていたか
- 3 内容・論旨(150点満点)+表現力(100点満点)で、各賞を決定

# 審 査 委 員 名 簿

◎審査委員長

氏 名	団 体 名 等
◎上 原 一 弥	和歌山県中学校長会 会長
平 井 美 雪	東牟婁地方中学校国語教諭代表
千 田 麻 代	株式会社和歌山新報社 編集長
高 岸 貢	NPO法人青少年活動サポートわかやま 理事
藤 田 直 子	和歌山信愛大学教育学部客員教授 和歌山大学教職大学院講師
佐 藤 陽 子	和歌山県青少年育成県民運動推進委員
吉 田 雅 彦	和歌山県教育委員会 生涯学習局長
田 伏 利 久	和歌山県共生社会推進部 こども家庭局長

## 大会の経過

- 作品の募集
  - ・ 2025年5月下旬頃(各地方により異なる。)
  - ・ 応募総数 8,823点
- 地方審査
  - ・ 6月上旬～同月中旬に8地方にて実施
    - 原稿審査会：岩出市
    - 予選発表大会：和歌山市、海草地方、紀の川市、伊都地方、有田地方、日高地方、西牟婁地方、東牟婁地方
- 各地方から県大会への推薦
  - ・ 6月27日(金)推薦の締切
  - ・ 8地方から発表者18名の推薦
- 和歌山県大会審査会
  - ・ 7月4日(金) 審査基準・採点方法・発表順の検討・決定等
- 和歌山県大会
  - ・ 8月2日(土) ホテル浦島 コンベンションホール鳳凰（那智勝浦町）  
18名の発表（うち1名は映像での発表）

## 「少年メッセージ2025」和歌山県大会式次第



日 時	令和7年8月2日(土) 12:30～16:00
場 所	ホテル浦島 コンベンションホール鳳凰 東牟婁郡那智勝浦町勝浦1165-2 日昇館3階
司 会	那智勝浦町立那智中学校 生徒会 村井 芹・加藤 綾菜・花井 悠州

- 1 開会
  - ・ 主催者挨拶
  - ・ 来賓挨拶
  - ・ 審査委員紹介
- 2 メッセージ発表  
18名
- 3 アトラクション
  - ・ 和歌山県立串本古座高等学校 書道部
- 4 審査結果の発表及び表彰
- 5 講評  
上原審査委員長
- 6 閉会



## 「少年メッセージ2025」和歌山県大会応募状況

	1 年	2 年	3 年	合 計
和 歌 山 市	0	578	620	1,198
海 草 地 方	303	312	241	856
那 賀 地 方	793	807	866	2,466
伊 都 地 方	0	140	491	631
有 田 地 方	530	553	505	1,588
日 高 地 方	22	437	187	646
西 牟 婁 地 方	383	306	186	875
東 牟 婁 地 方	132	106	325	563
合 計	2,163	3,239	3,421	8,823

## 過 去 の 応 募 数

回	年度	応募数	回	年度	応募数	回	年度	応募数
1	1979	77	17	1995	9,255	33	2011	12,534
2	1980	174	18	1996	9,336	34	2012	12,456
3	1981	310	19	1997	10,885	35	2013	11,458
4	1982	375	20	1998	11,608	36	2014	11,598
5	1983	119	21	1999	11,583	37	2015	12,665
6	1984	1,300	22	2000	10,473	38	2016	11,876
7	1985	3,299	23	2001	12,310	39	2017	11,107
8	1986	3,296	24	2002	12,893	40	2018	11,111
9	1987	3,371	25	2003	11,364	41	2019	10,658
10	1988	5,754	26	2004	12,135	42	2020	9,850
11	1989	6,118	27	2005	11,768	43	2021	10,317
12	1990	8,859	28	2006	10,781	44	2022	9,838
13	1991	8,659	29	2007	11,450	45	2023	9,264
14	1992	8,455	30	2008	12,095	46	2024	8,962
15	1993	7,005	31	2009	11,938			
16	1994	10,264	32	2010	12,771			

# 第47回少年の主張全国大会

## 内閣総理大臣賞

### 伝える

鳥取県 鳥取市立桜ヶ丘中学校 3年 谷口鉄馬

手を挙げた瞬間、みんなの息を吸う音が聞こえる。そして合唱が始まる。穏やかに始まった合唱が坂を登るように盛り上がっていく。僕はどんなふうに乗ってほしいかを、手で、そして全身で表現する。音楽が弾ける。僕が好きな瞬間のひとつだ。

僕は中学校で、合唱コンクールの指揮者を三度務めた。今年の曲は「心の瞳」。練習はまだ始まったばかりだ。

僕が指揮をするのは、口唇口蓋裂という病気の影響がある。僕の唇では、歌う時に上手に発音をすることができないが、指揮者なら、みんなの役に立つことができるからだ。

僕は生まれた時、唇と上の顎が裂けていた。このままでは、母親の乳を吸うことができずに死んでしまう。成長しても唇の隙間から息が漏れてうまく話ができない。僕は、生まれてすぐに手術を行なった。

顎と唇の隙間は一応塞がったものの、鳥取の病院では、それ以上の対応はできなかった。両親が必死になって探した岡山の病院で、赤ちゃんの僕はまた手術を受けた。手術を何度も繰り返し、何年も通院を繰り返した。今でも年に一度、岡山に通っている。そのおかげで、今では食事を取ることでもできるし、会話することもできるようになっている。

しかし、人と話す時に心に引っ掛かりがあるのも事実だ。発音がしにくいので、僕の言葉がどう受け止められているのか、相手の表情を気にしながら話すこともある。実際、何度も聞き返されることや、発音のことをからかわれることがあった。何度も聞き返される時は、相手に対して申し訳ない気持ちになる。からかわれた時は、馬鹿にされたことに苛立ちを感じる。何を言っても無駄だと感じて諦めるときがある。

小さい頃、口元にマスクをつけた僕のことを、見知らぬ女性が「かわいいねえ」と言った。しかし、マスクをとった僕の口元を見た女性は、僕のことを「かわいそうな子」と言ったそうだ。「かわいい」と「かわいそう」。わずかな違いかもしれない。けれど母にとっては大きな違いだった。「かわいそう」という言葉に、「不幸な子」という意味を感じたのかもしれない。母は「鉄

馬は可哀想な子じゃない!」と強く言い返したという。

そんな母も、「こんな体で産んでしまっでごめんね」と口にしたことがある。そのとき僕は「気にしてないし、大丈夫だで」としか返せなかったけれど、両親にとっても感謝しているのだ。この病気を治してくれるためにたくさんのお金をしてもらった。歯の矯正をするにも、僕の場合は特別な処置が必要なので、岡山の歯科医に毎月通わせてもらっている。ほとんどの場合、父が送迎してくれる。こんなふうにお金も、時間も、愛情もたくさんかけてくれた。僕の唇は、その証だから。

そんな僕が、中学一年生で合唱の指揮者になった。未経験のこの役割に強くひかれ、すぐ立候補した。実際にやってみると、どうやったら歌い手に的確に伝わるか、手で伝える面白さを知った。自分なりに指揮をアレンジして、どの部分をどう歌ってほしいのか、楽しみながら伝えることで、今までにない達成感を得られた。正しい発音は一つだけ、人を感動させる音楽は無限にある。僕は、僕の指揮でそれを表現できることに、言いようのない喜びを覚えた。指揮することで表現できる世界の広さは、僕が歌うことで表現できる世界を大きく飛び越えていった。

口唇口蓋裂の子供たちは、話すこと、表現することを躊躇しがちだ。でも、自分のことを伝えたい、表現したいと強く思っている。諦めずに伝えてほしい。言葉でも、それ以外でも、自分を表現する方法は、きっとある。伝えたい思いを受け止めあえたら、病気や障害、色々な違いにかかわらず、お互いの世界はもっと広がるはずだ。

今年の合唱曲「心の瞳」はこう始まる。

「心の瞳で君を見つめれば、愛すること、それがどんなことだか、分かりかけてきた」

言葉で言えない胸の暖かさを、見つめ合うことで伝えるという詩だ。

伝わる。きっと伝わる。だから伝えることを諦めないでほしい。言葉でも、音楽でも、見つめ合うことでも、自分らしいやり方が、きっとあるはずだ。

# 第47回少年の主張全国大会

## 文部科学大臣賞

### 教育の光と私の願い

岐阜県 各務原市立蘇原中学校 3年 イクバル ラリナ

私の名前はイクバルラリナです。パキスタンの北にある、スワートという美しい谷から二年半前に来ました。はじめに、私の父が言ってくれた言葉を紹介させてください。

「たとえ声がふるえても、真実を話しなさい。あなたの声は、だれかの希望になるかもしれない。」

この言葉があるから、今日、わたしはここに立っています。小さな声ですが、大きな夢をもっています。

スワートはとてもきれいなところです。春になると、谷には色とりどりの花が咲きます。川の水は青くて冷たく、山には白い雪がのっています。人々はやさしく、笑顔であいさつをしてくれます。でも、わたしの子ども時代は、ずっと平和ではありませんでした。小さいころ、音楽が禁止され、テレビも見るはいけなしと言われました。そして、いちばん悲しかったのは、「女の子は学校に行ってはいけない」と言われたことです。わたしはとてもこわかったです。でも、「わたしも勉強がしたい」「わたしにも夢がある」そう思っていました。

マララ・ユスフザイさんもスワート出身の女の子でした。彼女は「教育は私の権利」と世界に向けて声を上げました。その声は、大きな力になりました。私もこの言葉に大きな勇気もらいました。私も教育の力を信じています。教育は、光です。教育があれば、自分の力を知ることができます。夢を見ることができます。そして、自分を大切にできます。わたしの家族はわたしを応援してくれました。

「勉強すれば、なんにでもなれるよ」と父と母から言われました。

日本に来た時、新しい世界が待っていました。言葉・文化・食べ物もすべてが違っていました。同じことが二つありました。

それは、尊敬することの大切さと教育の力です。日本では、いつも私が夢を見ていたものが見られました。それは、女の子と男の子が、一緒に学ぶ学校です。みんなに教科書があり、きれいな教室があります。やさしい先生たちがいて、自分が成長できる

安全な場所です。私は、クラスみんなが考えたり、疑問をもったり、創造したりすることを教えられているのを見ました。そして、何よりも自由を見ました。学校は安心で、心強い場所です。日本は、すべての子供たちに平等で自由になれる教育を与えてくれました。そして、どんなこともできると私に教えてくれました。

私は将来やりたいことが見つかりました。それは、英語の先生になることです。英語が好きだからというだけではなく、他の人が世界中に向けて話せるよう手伝いたいからです。英語は教育やたくさんのチャンス、そして世界中の人と友達になるきっかけを開くドアです。

いつかパキスタンに帰り、すべての女の子が安全で自由になれる学校をつくりたいと思います。私は、パキスタンの女の子に「あなたは大切な人です。あなたの声が大切です。あなたの夢はかかないです。」と言いたいです。そして、私の村の親たちに言いたい。「女の子たちに教育を受けさせましょう。女の子が教育を受けることは、家族全員の希望だからです。」と。

私はまだ十四歳です。しかし、私の夢は大きく、希望で満ちています。世界を変えるのに、若すぎることはないと思います。若いからまだまだできることがあります。

私は自分のために話しているわけではありません。今も学校に行けるように待っているスワートのすべての女の子たちのために話しています。教科書を隠さなければならないすべての子供たちのために話しています。

そして、私はここで、どこに生まれたかに関係なく、すべての子どもが学ぶ権利をもつ世界を信じている、すべての人々に語りかけています。

私の人生に光を与えてくれた日本に感謝します。そして、スワート、私に力を与えてくれてありがとう。

私の両親、特に私の声を信じてくれた父に感謝します。

# 第47回少年の主張全国大会

## 国立青少年教育振興機構理事長賞

### JOIN ME

大阪府 泉大津市立小津中学校 3年 中村 詩織

「私がやります。一人でできます。」そう言って私は、何でも一人で抱えこんでいました。クラス劇では音響も舞台背景も一人で担当。校則見直しのための原稿づくりも、全部一人で引き受けました。

一人の方が、自分の思う通りのものができる。そう思っていたけれど、いつもみんなの輪から少し離れた場所で、黙々と作業をしている自分がいました。私は根本的に、人のことを、仲間のことを信頼できなかったのです。でも本当は寂しかった。

そんな私が変わったのは、放送部の活動がきっかけです。毎年、全国放送コンテストに出す作品を制作しています。この時の番組のテーマは「通知表」。日本全国の通知表を集めてみると、どれも数字やABCが並ぶ、似たようなものばかりでした。

「通知表って、そもそも何のためにあるんだろう。」そんな疑問から、私たちは泉大津市の教育委員会を訪問しました。

「通知表はね、自分の学びを振り返って、次の学びにつなげるためにあるんですよ。」

えっ、本当に？私はずっと、成績を数字で表すだけのものだと思っていました。

「通知表はね、決まった形はなくて、学校ごとに自由に作り変えていいんですよ。」

「通知表って、変えられるんですか？」通知表の形なんて、ずっと変わらないと思っていました。

「だったら、私たちで考えてみようよ。今の時代に合った、理想の通知表。」番組作りメンバーの一人が言いました。

「AIとか使ってみない？デジタルの通知表にしようよ！」

「通知表=紙」と決め込んでいた私は、その一言で一気に世界が広がった気がしました。

小さい頃から「自分の意見が正しい」と思い込んでいた私。しかし、他の人の意見に耳を傾けると、自分の「正解」がぐらっと揺らいで、新しい答えが見えてくると知りました。

完成したテレビ番組の中の「通知表」は、AIのアドバイザーが、「大丈夫。次はここをがんばればできるよ。」と、温かい言葉をくれるものです。私たちはその案を、番組として校長先生に提案しました。この動きが広がり、小津中学校では通知表の見直しが動き出しています。

その後、OECD主催の通知表についての国際ワークショップにも参加することに。そこでは、私がどんな意見を言ってもみんな頷いてくれて、認めてくれました。

私の学校の校則見直し活動はルールメイキングと呼ばれています。そこには私の意見を「それいいね。」と受けとめてくれる仲間たちがいます。ただ認めるだけでなく、それってどういう意味？」「本当に自由にして大丈夫かな。」といった、たくさんの自分とは違う意見も伝えてくれます。そんな仲間といることで、私も少しずつ変わっていった気がします。

ある日、母がこんなことを言いました。「自分と違う意見でも相手を理解しようとする。それが多様性ってことなんじゃないかな。」

その言葉が私の「かたさ」をさらにやわらかくしました。まるで、木の幹のように固かった私の考え方に、たくさんのやわらかい枝や葉っぱが生えてくるように。

通知表は「変わらないもの代表」だと思っていたけれど、実は変えられるものでした。そして、仲間との対話が、私自身の心も変えてくれたのです。

「変えられない」と思っているものは、自分の思い込み。あなたの中にも、変えたいけどあきらめている何かはありませんか。それはきっと、変えられます。私を変えたのは、たくさんの人との対話です。

最近になって、私が言えるようになった言葉があります。

「一緒にやろうよ。」

変えられないと思っている日本中のみんなに、伝えたい言葉があります。

「一緒に、変えようよ。」



**「少年メッセージ2025」和歌山県大会に  
ご協力・ご協賛いただきました皆様(順不同)**

- ・ 那智勝浦町
- ・ 社会福祉法人 和遊協社会福祉事業協力会
- ・ ニュース和歌山株式会社
- ・ 和歌山特報社

**ありがとうございました。心からお礼申し上げます。**



公益社団法人  
**和歌山県青少年育成協会**

〒640-8319

和歌山市手平2-1-2 県民交流プラザ「和歌山ビッグ愛」9階

TEL 073-435-5236 FAX 073-435-5238

<http://wpyda.org/>